

世紀末の影が色濃く迫る頃、僕は社会の歯車から外れた。

周囲は加速するように変わりつづけ、僕はその中で自らの存在が次第に透明になっていくのを感じた。鏡に映る顔には、もはや名前も過去も宿っていない。ただの人型の影が、ぼんやりとこちらを見つめ返すだけだ。

自分を取り戻すために、僕は筆を執った。それは、自らを再発見し、絶望の淵から這い上がるための唯一の手段だった。

僕は、作品を綴ることでした。自分を感じる事ができなくなっていた。

ある日、女性を描くことを決意した。それは、自らの内面を探る旅路の始まりでもあった。女性という対極の存在が持つ光と影、その複雑な陰影を追い求めることで、自分自身を証明しようとした。僕は、テキストエディタの中でのみ、現実から逃れ、再び存在の実感を得ることができた。

北向きのアトリエに、佳子が現れた。都会の喧騒から逃れてきたような、どこか儂はかなげな雰囲ま気を纏まとった二十八歳の女性だった。午前まの柔らかな光がアトリエを満たし、白い壁に反射して佳子の透き通った肌を淡く照らししている。彼女は窓際の椅子に腰掛け、微かに震える肩を自ら抱きしめていた。その仕草には、見えない重荷を背負った者の苦労がにじみ出ていた。

僕はスタンディングデスクに向かい、彼女の姿を描き始めた。それは、彼女の内面に触れ、自分自身の影をも照らし出すための、静かな儀式だった。書き進めるうちに、彼女の表情や姿勢に潜む無意識の孤独と恐れが、テキストエディタに浮かび上がってきた。

「怖い……」

佳子の声が静寂に包まれたアトリエに響く。

「大丈夫、僕がいる」

優しく微笑んでそういったが、僕も、内心では、彼女と同じものを抱えていた。

佳子は、僕にとって単なるモデル以上の存在となっていた。彼女は、僕の内に潜む影を映し出す鏡であり、同時に、僕をその影から救い出す光でもある。

月日が経つにつれて、互いに依存しながらも、僕らは次第に心を通わせていった。彼女の存在は、僕の孤独を癒し、僕は彼女にとって安らぎの場所となっていた。

僕たちは言葉を交わすことなく、ただ存在するだけで、お互いを察するようになった。

時が流れ、僕は七十三歳となり、佳子は四十一歳になった。年齢を重ねる中で、彼女の美しさはますます洗練され、その内面も輝きを増した。そんな彼女は、ある日、モデルを

引退するといいい出した。

「一緒にいよう」

その言葉には、彼女を失うことへの恐怖と、深い愛情が混ざり合っていた。

エゴに満ちた願いであることは分かっていたが、それでも、彼女を手放すことはできなかった。

黙って僕を見つめる佳子の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。それは、喜びなのか、それとも別の感情なのか、僕には分からなかった。ただ、その涙が何か大切なものを含んでいることだけは感じとれた。

北向きのアトリエで、僕たちは新たな章を刻み始めた。恋人でも夫婦でもない、特別な絆で結ばれた二人の静かで穏やかな日々だった。僕たちは互いの存在を慈しみ、支え合いながら生きている。

窓から差し込む光は、年老いた僕の顔にも、佳子の変わらぬ美しさにも、等しく降り注ぐ。その光と影が織りなす美しいコントラストの中で、僕はこれからも彼女を描き続けるだろう。筆を通じて、彼女の内なる輝きと、僕自身の存在理由を確認するために。

それは、女性の魅力の本質を探求する終わりのない旅であり、僕自身の魂を見つめ直すための永遠に続く闘いでもある。

その旅の終わりが来るまで、僕は北向きのアトリエで時を刻み続けよう。